

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2009年3月

博士論文審査報告書

論文題目：移動する子どもたちの成長・発達を支えることばの教育
の構築に向けて

—子どもの主体性が育む学びの可能性—

申請者氏名：尾関 史 (おぜき ふみ)

主査 館岡 洋子 (大学院日本語教育研究科教授)

副査 蒲谷 宏 (大学院日本語教育研究科教授)

副査 池上 摩希子 (大学院日本語教育研究科准教授)

本論文は、国や文化の間の移動を繰り返す子どもたちに対し、子どもたちの成長・発達を支えるためのことばの教育のあり方を子どもの主体性を軸に明らかにしようとするものである。以下、1. 論文の主題と構成、2. 論文の内容、3. 論文の評価の順に述べる。

1. 論文の主題と構成

近年、国や文化の間を移動しながら成長・発達する「移動する子どもたち」が増加し、その問題も多様化、深刻化している。このような現状の中で、本研究では子どもたちの成長・発達を支えることばの教育のあり方を考えていくことを目的としている。従来、これらの子どもたちは、学校教育の枠組みの中で支援を受ける存在として捉えられてきた。しかし、本研究では、今後、子どもたちに必要とされるのは、自らの学びを支え、主体性を発揮して学びを創っていく力であるという観点から子どもたちのことばの学びを捉えなおし、以下の3つの研究課題を設定した。

- ①移動する子どもたちが主体的に学ぶとはどのようなことか
- ②主体的な学びはどのようにして育まれるのか
- ③主体的な学びはどのように子どもたちの学びを支えるのか

論文全体は7章から構成される（図1「本論文の構成」参照）。

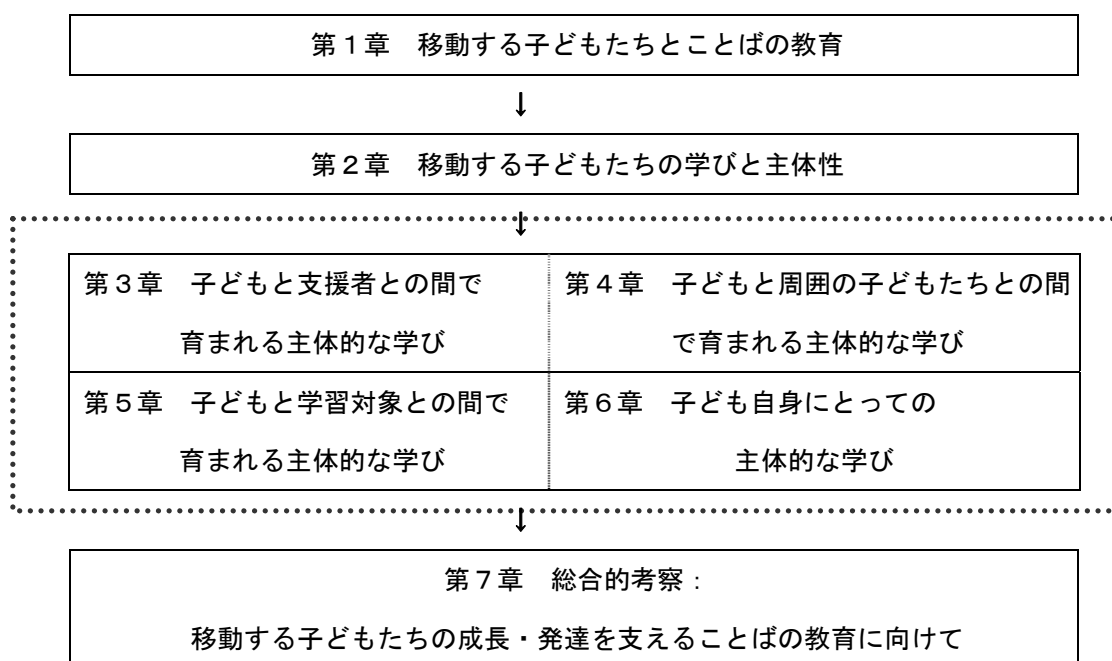


図1. 本論文の構成

第1章では研究主題について述べ、第2章では、移動する子どもたちの発達・成長を支えることばの教育を「子ども自身の主体性」の観点から捉える視座およびその研究方法について述べている。第3章から第6章までで、申請者自身の年少者日本語教育の実践研究を踏まえ、異なる角度からの考察を加えている。最後に、第7章において、それらの理論研究および実践研究から移動する子どもたちが「主体的に学ぶ」とはどのようなことか、また「主体的な学び」はどのようにして生まれ、学びを支えるのかを論じ、移動する子どもたちの成長・発達を支えることばの教育の視点を提示した。

2. 論文の内容

○第1章：研究主題（上述）

○第2章：研究の視座と研究方法

研究の視座としては、子どもたちの主体的な学びに注目した。主体的な学びの背景にある学習観についてまとめ、続いて、年少者日本語教育研究、成人に対する日本語教育研究、発達心理学研究における主体性研究を概観し、それぞれ学習者の主体性がどのように捉えられているのか、主体性を育むための学びの場はどのように提案されているのかを探った。移動する子どもならではの主体的な学びを探っていくためには、学びをさまざまな人や対象との関係性の中で多元的に捉える必要があること、また、教師や支援者の視点からだけでなく、子ども自身の視点も含め、多角的に考察していく必要があることが示されている。

研究対象である「移動する子ども」は、外国人児童のV（オーストラリア人・9歳・女）と、帰国児童のK（日本人・9歳・男）である。二人は、国の間を移動しながら成長・発達を遂げている点、また日本語と英語という二つのことばを抱える中で成長を遂げてきたという点、日本語がほとんど話せない状態で日本での生活をはじめたという点から、本研究の対象となる「移動する子ども」といえる。

研究調査方法として、申請者は児童Vに対しては、2006年8月より2007年11月までの1年3ヵ月間にわたり、家庭での個別支援および学校での入り込み支援をそれぞれ週に一度ずつ行い、日本語学習の支援および学校での教科学習の支援を行った。一方、児童Kに対しては、2002年5月から2003年10月までの1年5ヵ月にわたり、日本語学習および教科学習の支援を行ったほか、在籍学級における授業観察を行った。両者に対して、申請者自身が支援者として現場に積極的に介入し、現場の人々や現場の出来事に関わる中でさまざまな実践を試みながら、子どもと周囲の教師・支援者や子どもたち同士のやりとり

の中で、ことばの習得のプロセスを把握するという長期的な観察を行い、質的調査方法により分析した。

○第3章：移動する子ども V と支援者との間で育まれる主体的な学び

スキヤフォールディングの概念をもとにしたことばの支援を行い、支援を通して V にどのような学びが育まれていくのかを考察した。考察の結果、支援者である申請者が学びの捉え方や V への関わり方を変化させたことにより、V が学びに主体的に取り組む場面が生まれていく様子が明らかにされた。

○第4章：移動する子ども K と周囲の子どもたちとの間で育まれる主体的な学び

子どもたちの学びには、教師や支援者とのやりとりだけでなく、共同体の中での学習者同士の学び合いが大きな意味を持っていると考え、K の授業参加をことばのやりとりに注目して捉え、そこで見られた授業参加の様子を「K のことばの使い方の変化」と「K と周囲の子どもたちとの関係性の変化」の2点から分析した。考察の結果、K と子どもたちが互いに相手を一人の主体として受け止めやりとりをすることにより、両者の間に「教える—教えられる」という固定的な関係ではない「相互主体的な関係」が築かれ、そのような関係の中で K の授業への主体的な参加が可能になっていく様子が明らかにされた。

○第5章：移動する子ども V と学習対象との間で育まれる主体的な学び

支援者と V の間で行った「意味創り」を目指した支援を通して、V 自身はどのように学びと向き合い、どのようなプロセスを経て学びを自分のものとし、学びに主体的に関わるようになっていったのか、また、そのプロセスでどのようなことばの力を育てていったのかを考察した。考察の結果、子どもが学びに主体的に関わっていくためには、子ども自身が学習内容や学習への参加に自分なりの意味を感じる事が重要であり、それにより学びを自分なりに管理したり広げたりしながら学びに主体的に関わるようになっていく様子が明らかになった。また、V にとってことばが単なる学ぶべき知識としてではなく、自分の考えを表現する媒介、自分の考えを深めていく媒介、自分の考えを相手に伝える媒介となっていくことで、V が主体的に学びに関わっていく様子が考察された。

○第6章：移動する子ども V 自身にとっての主体的な学び

主体的な学びを子ども自身の学びのプロセスとして捉え、子ども自身の語りから学びを探っていくことを目指した。申請者がこれまで V に対して行ってきた支援および日本の学校での学習を V がどのように捉えているのかを日本および帰国後のオーストラリアでの V

の語りをもとに、長期的なスパンで考察した。考察の結果、Vにとって主体的に学ぶこととは、Vが周囲の友人や学習内容との間で社会的な関係を築いていくことと深く関わっていたことが明らかになった。

○第7章：総合的考察

本研究で明らかになった知見を改めてまとめ、本研究の3つの研究課題に対してそれぞれ総合的な考察を行っている。

1) 移動する子どもたちが主体的に学ぶとはどのようなことか

- ① 一人の主体として周囲に積極的に働きかける場面
- ② 他者とやりとりをする中で主体となっていく場面
- ③ 自分なりの学びを創っていく場面

2) 主体的な学びはどのようにして育まれるのか

- ① 関係性の中で相互に育まれていく主体的な学び
- ② 子どもにとって意味のある学びを創ることで育まれていく主体的な学び
- ③ 周囲とのやりとりの中で動的に育まれていく主体的な学び

さらに、子どもたちの主体的な学びを育む際の媒介となっていたのは、いずれもことばであり、移動する子どもたちのことばの教育では、このような主体的な学びを育んでいく際の媒介となるようなことばの力を意識的に育てていくことが重要であると主張している。

3つめの課題については、以下の3つの観点から検討を加えている。

3) 主体的な学びはどのように子どもたちの学びを支えるのか

- ① 学びにつながりと広がりをもたらす主体的な学び
- ② 人間関係の構築を促す主体的な学び
- ③ アイデンティティの形成を支える主体的な学び

主体的な学びは、子どもたちが一人の主体として社会生活を営んでいく上で生涯にわたって必要とされる学びであり、その意味で子どもたちの成長・発達を支える力としても生きてくる学びであると主張している。

最後に、本研究のまとめとして、子どもたちの成長・発達を支えるためのことばの教育に向けて必要となる視点を下記のように提示している。

<ことばの学びを捉える視点>

- ① ことばの学びを子どもの主体的な学びの側面に注目して捉えること
- ② ことばの学びを周囲との関係性の中で多元的・多角的に捉えること

<ことばの学びを育む視点>

- ① 相互が主体として育っていくための学びの場を創ること
- ② 主体的な学びを育む媒介となることばの力を育てること

<ことばの学びを評価する視点>

- ① 子どもにとって主体的な学びとなっているかどうかという観点で評価すること
- ② 評価と学びのデザインが循環的につながっていくこと

3. 論文の評価

本研究の評価できる点を以下にまとめる。

1) 研究課題について：学校教育の枠組みを越えた長期的な視野・多元的な視野で子どもたちの学びを主体性の観点から捉えようとしている点

従来の年少者日本語教育では、子どもたちのことばの教育は、日本の学校教育の枠組みの中で捉えられることが多く、学校での授業内容をいかに理解させるか、授業についていける日本語の力をいかにつけるかということが盛んに議論されてきた。しかし、その取り組みだけでは不十分であると考え、本研究は子どもたちの学びを日本の学校教育の枠組みの中だけで捉えるのではなく、母国での学習経験、そして学校を卒業した後に広がる将来とのつながりという「長期的な視野」、また、家庭での家族とのやりとり、地域でのやりとり、母国の友人とのやりとりといった「多元的な視野」から捉えている。子どもたちの学びを学校教育の枠組みを越えて子どもの成長・発達という長期的かつ多元的な視野で捉え直すという視点は、今まで提唱はされていても具体的に示されておらず、その意味で、本研究の知見が年少者日本語教育の新たな方向性を示すきっかけとなると考えられる。

また、これまで、年少者日本語教育では子どもたちの学びは教師や支援者が支えるものだと考えられ、教師や支援者が子どもたちの日本語習得をどのように支援していくのが中心的なテーマとして議論されてきた。しかし、子どもたちは単に支援を受けるだけの存在ではなく、自ら学びを創り出しコントロールしていく力を持っているのではないかという問題意識から、本研究では、子どもたちを周囲との関係の中で自ら主体的に学びに関わり、主体的に学びを創っていくことができる存在として捉えること、また子どもたちが主体的に関わることのできる学びの場について検討していくことを目指している。これは、従来までの「支援を受ける存在としての子ども」という捉え方を「学びを創り出す存在としての子ども」という捉え方へと転換させる可能性を持つ重要な視点であると評価できる。

2) 研究方法について：実践研究を通して、子どもたちの学びを多元的な関係性および多角的な視点から考察している点

本研究の考察は申請者がそれぞれ1年半近くにわたって日本語の支援を必要とする2名の子どもに関わった言語教育支援実践を踏まえて行われた。申請者は支援者として子どもたちの学びの場に積極的に介入し、子どもや子どもの周辺の人々とやりとりを繰り返しながら実践を行い、その過程を記録している。そして考察の際には、子どもの変容過程だけでなく、支援に関わった申請者自身の変容過程および周囲の子どもたちの変容過程にも同時に注目している。従来までの年少者日本語教育では、子どもたちの学びを考察する際、子ども側の変化を追った考察が中心であったが、本研究では、申請者や周囲の子どもたちが学びの場に関わる中でどのような変容を遂げたのか、またその変容にどのような意味があったのかについて丁寧に考察を行っている。これは、これまでの年少者日本語教育では注目されることの少なかった支援者自身の変容過程、周囲の子どもたちの変容過程に光を当て、子どもたちの学びにおける周囲の他者の存在の意味を明らかにしていくという実践研究の観点からも意義がある。

さらに、本研究では、子どもたちの主体的な学びを捉えるにあたり、従来、注目されることの多かった「子どもと支援者」の関係にとどまらず、「子どもと周囲の子どもたち」「子どもと学習対象」「子どもと子ども自身」という多元的な関係性の中で捉えようと試みている。さらに従来にない点は、考察にあたり、従来までの「支援者の視点」だけでなく、「子ども自身の視点」「周囲の子どもたちの視点」にも注目し、多角的な視野から考察を深めたことである。特に、子ども自身の語りに注目し、子ども自身の視点から子ども自身にとっての学びの意味を探った点は、これまでの年少者日本語教育研究には見られない新たな視点である。

3) 考察結果について：子どもたちの主体性に正面から取り組み、年少者日本語教育に新たな視点を提示した点

最終章の総合的な考察において、これまで十分な議論がされてこなかった移動する子どもたちの主体的な学びの様相、主体的な学びを育てていくプロセス、主体的な学びの意義について明らかにした。特に、考察の結果、子どもに関わる支援者、周囲の子どもたち、子ども自身の全てが相互に主体となって変化していく中で子どもの主体的な学びが育まれていくということを実際の学びの事例をもとに示した点は、従来までの子どもにどのよう

な学びを与え、どのような学びが起こっているのかを明らかにしていく年少者日本語教育研究のことばの教育のあり方に対し、新たな道筋を示すものだといえよう。

本論文では、受理審査の時点で指摘された問題点の多くが改善されており、特に主体性をめぐる議論については深化するとともに一貫性をもったものとなった。しかし、以下の点が十分記述されないまま残されている。

1) 主体的な学びにおける発達の見点

主体的な学びに関して、成人学習者とは異なった点として、移動する子どもたちには発達の視点が必要である。この発達の視点は論文全体を通してみれば、かなり意識化されて分析や解釈において留意されているが、まだ明示的に示されているとはいえない。子どもたちが言語的認知的に発達の過程にあるということで、日本語学習に対する「動機」が希薄になりがちであることに加えて、主体性を構築していくうえで、子どもたち自身に何が求められ、また、支援者として何をどのように働きかけるのが望ましいかを示すと、論旨がより明確になったと考えられる。

2) 本研究で明らかになった理念を、今後どう具体的に実践につなげていくのかという点

本論文では子どもの主体的な学びに注目し、その意義が述べられているが、それが学校や社会の文脈の中でどのように展開され得るのか、そうした点に関する見通しが述べられることで、より説得力のある論考になると言えよう。

3) 社会文化的な文脈の中での実践の位置づけの記述

本研究においては、取り出し支援や入り込み支援などミクロな場面での支援が中心であるが、その背景にある社会文化的なマクロな文脈の中に今回の実践を位置づけることが必要であろう。子ども、両親、支援者、学校の教師、またそれらを取りまく社会などによって支援者の活動や子どもの学びも規定されてくる。周囲の社会文化的文脈とのつながりの中で主体的な学びを捉えていくことで、より重層的な考察が可能になると考えられる。

以上のような課題を残しながらも、本論文は移動する子どもたちの成長・発達を支えることばの教育を子ども自身の主体的な学びに注目し捉えなおす必要性和その意義を主張した論文として高く評価することができる。以上をもって、本論文が博士（日本語教育学）の学位に値する論文であることを報告する。